

今やらねば

田中館愛橋の生涯

17



【3人の田中館教授】

二戸から世界的功績者

二戸市から世界的業績を遺した3人の「田中館教授」が出ている。愛橋、寅士郎、そして秀三である。

田中館愛橋は二戸郡長を務めた稲蔵を父に、東京大学名誉教授で文化勲章受章の地球物理学者。では、他の二人の田中館教授とはどんな人物だろうか。寅士郎は1878（明治11）年生まれ、愛橋の異母弟。一高から東京大学物理学科入学。主任教授は兄愛橋であった。1884（明治17）年生まれの秀三は稲蔵の末弟・与八郎の子で、愛橋、寅士郎の従弟に当たる。三高から東京大学へ進み、地質学科首席卒業で「恩賜の銀時計」を受けた組である。

二人の功績を詳しく紹介する。寅士郎は日本人として「虹の科学史」に名を遺した科学者である。寺田寅彦や愛知敬一などと大学院へ進学し、理論物理学を専攻する。指導した長岡半太郎は寅士郎と愛知に、「虹のスペクトル」を研究テーマに与えた。虹の研究史には、アリストテレスからデカルト、ニュートンまで、世界の大天才の名が並ぶ。

寅士郎らは、太陽を「円光源」として新理論を完成させた。1904（明治37）年、時に寅士郎、弱冠26歳の大学院生であった。これにより、虹の数学的理論は一つの完成を見たと言われる。東大講師、秋田鉱専教授、慶應義塾大教授などを歴任したが健康がすぐれず、惜しくも51歳の若さで没した。

次は秀三である。日本の火山・湖沼研究の先駆者であり、昭和新山の名付け親として名高く、万国火山学会初代副会長も務めた。

秀三には「異例」という言葉が似合う。大学卒業と同時に東北帝国大学農科大学（北海道大学農学部）の講師と



二戸が生んだ3人の田中館教授。左から秀三、愛橋、寅士郎。二戸歴史民俗資料館提供

頭した。愛橋は「金のために時間を無駄にするな」と、手紙で激励している。6年後に帰国すると、愛橋の一人娘・美穂と結婚した。

また、第2次世界大戦中のシンガポールでこんな逸話を残している。世界屈指の熱帯植物園である「シンガポール植物園」は、敵国イギリスの文化施設だが、貴重な遺産として戦火か

なり、翌年には早くも教授、そして文部省から独英に留学を命じられた。3年の期間終了後も、ナポリ大学講師などで糊口をしのぎながらベスビオなどの火山研究に没

り、翌年（菅原孝平）田中館愛橋会副会長、二戸歴史民俗資料館館長）

【ミニコラム】 スケール大きい

学者魂

「…何処の国に参り申し候ても、火山学者は自説を主張し自分の信ずる所を何処までも押し通す勇氣は、感心に御座候。これに比すれば日本の如き火山学の、火山学者の勇氣に乏しきは、寒心の至りに候…」ちょうど100年前、ナポリ滞在中の田中館秀三から愛橋に贈られた手紙の一節である。「先生のようなスケールの大きい学者は、日本の大学では使いきれなかったであろうか」という趣旨で、秀三の学者魂が垣間見られる。